

第 4 号

川越初雁会



第三回定期総会開催 新会長に岩堀氏

関口前会長からバトンを引き継ぐ

平成二十五年九月七日(日)の総会にて川越初雁会会長が前任の関口会長から、岩堀会長に引き継がれました。以下に会長の所信を述べて頂きました。

川越初雁会会長にご推挙を受けました。宜しくお願い申し上げます。設立以来ご協力くださった会員諸兄に衷心より感謝申し上げます。



岩堀新会長

最近、他地区の初雁会と交流する機会も増え、各分野で活躍される同窓会員の動向を知る機会も多くなり、母校への親しみが益々高まって参りました。

川越初雁会は会員に最新のニュースを配信する役割を負っております。幸い創立以来、広報誌を毎年二回発行する体制が整ってきま

した。加えてホームページも次第に充実してきており、未加入の卒業生にも覗いていただけるよう願っております。

総会、講演会、春秋の散策会、ゴルフ会など各種催しを通して、会員同士の親睦交流も深まり、楽しさも出てきたように思われます。又旧制中学と高校卒業生の交流する場にもなり、永い

歴史を知る良い機会になっていると思われれます。

毎年九月の総会を、母校の「くすのき祭」に合わせて開催しています。卒業以来足の遠かった母校へ寄つてから総会会場にくる会員が増えてきました。

高校時代に汗を流した部活動の話題などが飛び交い、かつての青春時代を思い起こす機会になれば有難いと存じます。更に何かの形で母校へ貢献する機運が盛りあがるのが、期待されております。

最近携帯電話の機能が革新的に高まり、ホームページを読むことが容易になりました。ネットを使い手軽に内容を確かめ、会員になれる方策を模索してゆきたいと考えております。これにつきましたは、卓越した会員のご指導をいただきましたと切望する次第です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

新役員名簿

会長(新任)	岩堀 弘明
名誉顧問	川合 善明
顧問	松本 博一
顧問(新任)	関口 一郎
副会長	石山 豊
	江守 秀男
	並木 英雄
	長坂 勲
	小高 秀一
	磯野 憲一
	金子 憲二
副会長事務局長	加島 篤人
副事務局長	高橋 篤
監事	原 宗康
	大河原 光行
	可児 一男
	佐藤 明
会計	松村 定明
	木下 重美
広報委員長	松村 定明
広報委員	荒牧 澄多
	齊藤 智
	田中 諭
ゴルフ同好会長	松本 寛

海外遠征登山今昔

市川章弘氏総会記念講演（高七回）

市川章弘さんは、川越高校が輩出した、最も有名な登山家であります。海外登山がまだ一般的ではない一九六〇年代から七〇年にかけて、三回もの海外遠征を行い、初登頂も含むいくつもの実績をあげられました。今回の講演では、海外遠征の話を中心に、輝かしい山歴を振り返っていただきます。以下に講演の概要を記します。

国内における活躍

市川さんの登山家としての人生は、一九五二年川越高校に入学し、山岳部へ入部した時から始まりました。父親である市川宗貞さんも川中のOBで、山岳部に所属しており、父親の影響で山を始めたとのこと。なお、お父様の宗貞さんは、昭和二年の夏には立山から針ノ木谷の長期合宿に参加、後には飯能市長を務められ



市川 章弘氏

ました。

川高山岳部時代の市川さんは、奥秩父や南アルプス、八ヶ岳などに登られたそうです。川高卒業後、成城大学山岳部に入部、ここから困難な登山への挑戦が始まりました。当時は夏期における国内の難ルートはすべて征服されており、課題は積雪期の登山へと移っておりました。大学時代以降の活躍は目覚ましいものがあり、日本の登山史の中でも市川さんの名は随所に登場します。

特に、鹿島槍ヶ岳直接尾根の登攀（一九五九年三月）



初雁会での市川さんの講演

や、北穂高岳滝谷のグレポンの登攀（一九五九年二月）は、いずれも積雪期の初登攀であり、今でも高く評価されております。

大学時代には、鹿島槍や北穂の他にも、剣岳三ノ窓や北岳バットレス、また積雪期の富士山など、国内における骨のある山域には何度も通ったそうです。

卒業後も数年は同じように登山を続けました。ところが、当時は転落事故が多発しており、市川さん自身も登山中に他パーティーの事故に何度も遭遇、やりきれない気持ちになり、登山

より距離をおくこととなったそうです。

アコンカグアの南壁

市川さんたち成城大OBは、昭和三十年代から、ヒマラヤの登山計画を具体化させようと、いくつもの高峰を登山申請しておりました。

なかなかチャンスが回ってこなかったのですが、南米アンデス山脈の最高峰アコンカグア山六九六二mの南壁ルートの登山が実現したのが、一九六六年（昭和四一年）のことでした。

一行は横浜から貨物船に乗り、北海道から北アメリカを経由して南米に行きました。現地では軍隊が協力してくれて、物資の輸送を手配してくれました。

アコンカグアの最終アタックは、一ビバークの末、四人のメンバーが登頂に成功しました。困難な南壁からの積雪期の登頂で、この

登攀はフランス隊に続く第二登とされております。

遠征期間は八ヶ月の長期に及びました。当時の海外遠征は、登山の記録が一冊の豪華本となって報告されるほど、名誉であり国家的な事業であったそうです。

マカルー東南稜初登攀

一九七〇年、ついにヒマラヤへの登山が具体化しました。八千m峰のひとつ、マカルー八四六二mの未踏の東南稜です。市川さんは一六人の登山隊の登攀隊長であり、最終キャンプまで登り、アタック隊を総指揮するという重責をにないました。

アタック当日、午後二時に出発した二人のアタック隊員は、一二時間かけて登頂し、記念のピッケルに日の丸を巻き付けて埋め込んできました。第二次アタック隊には、市川隊長も含まれていましたが、高度の影

響で無理と判断、全員下山という決定となりました。

市川さん自身、登頂を逃したことは、かなり心残りであったようです。しかし、難ルートで知られるマカルー東南稜の初登攀の事実には変わりなく、このニュースは日本で大々的に報じられました。

ところがこの年は同じヒマラヤで植村直己が日本人としてエベレスト初登頂した年と偶然重なりました。世間の関心はエベレストにあり、植村直己が登頂したあの写真はあまりに有名になりました。

他方、市川さんのマカルー東南稜は、機材の不都合から頂上での「証拠写真」が撮影されなかつたのです。山頂からの写真で登頂したかの判断がされていた時代で、一部では登頂が疑われたとのこと。しかし一年後にその懐疑は晴れることとなります。

翌一九七一年、フランスの登山家ヤニック・セニョールがマカルーの西稜からの初登頂に成功、頂上に残されていたピッケルと日の丸を発見し、持ち帰ったのです。この事は結果的に、市川隊の登頂を証明すると同時に、フランス隊の成功も証明したことになります。

先行隊の記念品を、後続隊が持ち帰るといふ美談は、当時の小学校の国語の教科書にも採用されました。数冊、現物をお持ちいただき、講演中、拝見させていただきました。

ジャーヌーの第二登頂

マカルーから四年、一九七四年にまた海外遠征のチャンスが訪れました。ヒマラヤの怪峰といわれたジャヌー七七一〇mです。山容が個性的で、おそらく七千m級の山では、世界で最も有名かつ憧憬の山と思われまふ。

一九六二年にフランス隊が初登頂して以来の挑戦となります。この登山には、NHKが特番を企画しました。当時の小型八ミリ映写機を山に持ち込み、映像を記録したことは、時代の先駆けとなりました。このNHKが制作し放送した番組映像を、市川さんのお話の後、スクリーンで鑑賞しました。七〇年代の映像であり、画質が荒いのは仕方ありませんが、困難な登山の様子がよく現れていました。

市川さんも登攀隊長としてしばしば登場します。また市川さん自身がカメラを手にして撮影した場面もありました。特に、頂上付近の雪稜のナイフリッジを馬乗りにして進む場面は迫力がありました。

市川さんにとって、ジャーヌーはヒマラヤでの初登頂となりました。と同時に最後の「挑戦」となりました。

(文責 事務局)

平成二十四年度決算書及び二十五年度予算書

平成25年度予算案		
収入の部 (円)		
項目	予算額	摘要
会費	720,000	正会員360名×2,000円
入会費	20,000	新入会員20名×1,000円
前年度繰越金	93,054	
合計	833,054	
支出の部 (円)		
項目	予算額	摘要
広報紙発行費	200,000	2回×100,000円
散策会補助金	100,000	春・秋2回×50,000円
会議費	20,000	委員会等会議費用
講演会費	30,000	講演会会場費ほか
通信費	150,000	はがき、郵送料、他
印刷費	60,000	各種印刷代
事務費	80,000	消耗備品、コピー代ほか
積立金	100,000	
HP運用費	20,000	サーバー利用料
予備費	73,054	
合計	833,054	

平成24年度決算		
収入の部 (円)		
項目	決算額	摘要
会費	608,000	292名×2,000円 ほか
入会費	28,000	28名×1,000円
雑収入	7,354	普通預金利息ほか
前年度繰越金	80,550	
合計	723,904	
支出の部 (円)		
項目	決算額	摘要
広報紙発行費	204,750	会報(2号・3号)
会議費	16,800	委員会、事務局会議
講演会費	20,000	講演費用
通信費	146,850	はがき、郵送料、他
印刷費	37,800	封筒印刷代
事務費	70,730	消耗備品、コピー代
積立金	128,000	入会金の一部
HP運用費	5,920	サーバー利用料
次年度繰越金	93,054	
合計	723,904	

歴史を受け継ぐ水泳部

水泳部OB会会長 佐藤 明(高二十回)



平成 25 年度水泳部 OB 会総会の写真

埼玉県立川越高等学校、創立八十周年記念誌によれば、川高水泳部の歴史は戦争が終わった直後まで遡ることが出来るとのことなので、部としての齢は既に還暦を過ぎ、古希にならんとしています。

また、同誌によれば、旧制川越中学校には夏に千葉県に教師引率のもと、大勢で水泳訓練に出掛け、泳力テストを行って「水泳部」と称していたとの記述がみられます。川高における「水泳部」とは、旧制中学の大先輩方より引き継がれた歴史ある名称であり、現役生徒、OB会員ともにこれを未来へとつな

ぐ意識と誇りを持って歩んで行きたいと、OB会長として感じている次第です。

水泳部OB会は昭和五十年頃に江守秀男氏（昭和三十年卒）、高野慎三氏（昭和三十二年卒）を中心に組織され、定期的に会員相互の交流・懇親の場を設けて来ました。

一九九九年（平成十一年）の川高創立、百周年を機に、より多くの活動を行えるよう機動性と多能性を備えた体制を整え、現在に至っています。現在は七百余名の会員を擁し、名簿での連絡先判明率も約九割と非常に高い数値を誇っています。

OB会では、親睦活動として毎年の会報の発行、ホームページの開設、日本マスターズ水泳協会への登録と競技会への参加、三年に一度の総会開催などを行っています。また、地元の川越水泳協会とも連携して、水泳の普及、川越市民体育祭の開催にも微力ながら協力しています。OB会の重要な目的の一つとして、現役部員の支援活動の充実にも注力しており、練習用具の寄贈、川高歴代最高記録樹立者の表彰などを行っています。

OB一同、現役部員の活躍を常に祈念していますが、この思いが現役部員の心の負担とならないよう過度な干渉は避け適度な距離感を保ちつつ、卒業後には現役部員の活躍を下支えするOB会の仲間に溶け込めるよう配慮していきたいと思っています。

OB会活動の中でも会報発行、現役部員の支援活動はそれなりに大きな費用の負担もありますが、役員が知恵を出し、一人でも多くのOB、一人でも多くの部員が会の活動を享受できるように毎年工夫しています。OB会員諸兄にはOB会の会計事情もご賢察の上、この場をお借りして会費の納入をお願いする次第です。

現在、OB会を概観して感じていることは、俊秀を輩出する川高のOB会ならではの贅沢な悩みと申しませいか、会員居住地が日本全国はもとより海外にも及んでおり、思いのほか川越近郊の在住者が少ないことです。

OB会の活動は川高水泳部が存続する限り続くものです。会員諸氏、特に川越近郊をはじめとする首都圏在住の皆様には、どうか時間の許す限りOB会総会へのご参加、さらにはもう一步踏み込んでOB会の運営にもお力添えを頂きたいと思っています。

末筆ながら、母校川高の現役水泳部員、全生徒諸君、細田校長を始め教職員の皆様、水泳部OB会員、全川高OBの皆様の益々のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

雁の記

氷川神社

川越散策日記

荒牧 澄多記

(高二十七回)

今回は、川越御城下の総鎮守氷川神社にお参りしましょう。

当社の起こりは、江戸時代中期の書写「氷川大明神縁起」によれば、欽明天皇二年(五四一)大宮氷川神社から分祀したと云われています。はじめて「ひかわ」の文字が見られるのは、室町時代に記された「永享記」の太田道灌の段です。

江戸時代には、代々の川越城主に深く崇敬をされてきました。今でも、正月には多くの参拝客が列をなしています。ここで結婚式を挙げられた諸兄も多いことでしょう。

昨年は、当社をゴールに行燈ウォークが行われました。前号でのご登場いただいた糸原さんがご住職を務める蓮馨寺で行燈をいただい

てスタート、市内各所をめぐり、最後は当社に行燈を奉納し良縁祈願を行うというものでした。



スケッチ 大護 皓夫 画 (高 11 回)

大和守齊典が三五両を寄進、氏子が二二五〇両を出して天保一三年(一八四二)に起工します。嘉永二年(二八四九)竣工、最終的には明治三年(一八七〇)に上棟遷宮をしました。規模は正面三柱間側面二

柱間、屋根は入母屋造り銅瓦葺きです。正面の屋根の上には三角形を見せる千鳥破風を置き、向拝の屋根は曲線をいかした唐破風にするというように、大変複雑な屋根の形をしています。今はその周りに、彫刻を風雨

それではまず石鳥居をくぐり、手水舎で清めましょう。拝殿でお参りをしたら、その右側から奥に回り込むと本殿が見えてきます。本殿は、川越城主松平

から守るための銅板葺きの庇がつけられています。もっとも特徴的なのは、なんといても建物を覆い尽くす彫物です。柱などの表面には、地紋といわれる

彫りを施しています。本殿の壁を飾るのは、源氏にちなむ題材です。縁の下の羽目板は、天保年間の十カ町の山車に載っていた人形を題材にしており、氏子とのつながりの深さが偲ばれます。本殿と向拝柱をつなぐ海老虹梁などは中が透けています。籠彫りという技法

です。ここまで彫られていると、梁という構造材の役目を果たしているのでしょうか。これらの彫刻は、江戸彫物大工の御三家の一人島村俊表と熊谷住の飯田岩次郎です。島村は、この後、重要文化財に指定されている成田山新勝寺の釈迦堂を手掛けます。棟梁は、川越城主お抱えの印藤捨五郎と桑村三右衛門です。

本殿の右手奥に大きなけやきが二本立っています。樹齢六百年といわれるご神木で、この周りを八の字にまわると御利益が・・・

さらに、本殿の裏から西側に回り込むと、大小様々なお社や石塔などが三〇基近くもひっそりと佇んでいます。たまにはこちらにも拝んでまいりましょう。実にさまざまな神様たちです。遠地にいかなくても身近なところで参拝できるかもしれませんよ。

境内を一通り巡ったら、氷川会館寄りの朱に塗られた鳥居から出て新河岸川でも散歩して見ましょう。この鳥居は、平成のご大典を祝して建てられました。高さは約十五メートルもあり、木造では日本最大級の大鳥居です。さて、今回の氷川神社の大鳥居のスケッチは、前回までの木下重美氏から大護皓夫氏の描かれた趣のものが変わりました。

参考文献 川越の神社建築「川越氷川祭りの山車行事」調査報告 ともに川越市教育委員会発行中

秋の散策会

原 宗康 (高四十二回)



入間川最元流をたずねて

初雁会主催の散策会は、これまで春二回行われてきましたが、今回初めて行われた秋の散策会では、校歌に「入間の水の末永し」と歌われた「入間川の水源」を訪ねました。

十一月十六日快晴、総勢十七名の参加者一行は九時に川越駅西口を出発し、飯能市上名栗に向かいました。細い林道を二十人乗りのマイクロバスが行き、途中「入間川の起点の碑」を横目にさらに奥へと進み、一時間半ほどで林道の終点(海拔七百m)「ウノタワ」への登山口に到着、そこから水源を目指して十七名全員が沢



筋を登り始めました。この秋の多雨により沢の水流が増しているものの、そこには、光が遮られ苔のむす豊かな林床が広がっており、落ち葉を踏みしめながら、やがて三十分程で澄んだ水の湧きだす水源に到着。各々がその水を頂きました。その後、一行は入間川の起点の碑で記念撮影を行い、大鳩園キャンプ場へ戻りバーベキューを行いました。そこでは高十三回長島さん特製ほうとううどんを頂き、冷えた体を温めながら、参

加者同士酒を交わし、大いに楽しい時間を過ごすことができました。高二十九回田中さん楽しい企画をありがとうございました。

〈追記〉

入間川の起点を見てから、辺りの落葉樹を中心に豊富な樹林帯を眺め、校歌にある「入間の水の末永し」は当分確保できるだろう、との見通しを確認しました。また、最近シカの増加で表土が流失し、森林崩壊を起こす山が増えてきたが、この山塊はその危険が今のところ感じられない。それ水源まで行き全員で確認しました。

ゴルフ同好会

優勝者 堅木 堅一 (高八回)

十一月二十一日(木) 絶好のゴルフ日和に恵まれ、第四回川越初雁会ゴルフコンペが川越カントリークラブで開催されました。



第4回川越初雁会ゴルフコンペ

私は中コース第一組で細村淳(高八回)、星光諭(高十回)、笹木弘治(高十九回)の皆さんとラウンドしました。

二番、三番ホールでダブルボギーをたたきましたが、六番のロングホールで思いがけずバーデイがきて、前半は私としては四十一の好スコアで廻りました。後半の西コースでは、ダブルボギーを四ホールたたき四十七でしたが、幸運にも六回のダブルボギーがすべ

て隠しホールに入っており、それが優勝への要因になったと思います。

来年は喜寿を迎えますが、ゴルフで健康づくりに励み、又元気に川越初雁会のゴルフコンペに参加したいと存じます。現役の時に親しくした友人と過ごした楽しい一日でした。

設置してくれた幹事の皆様に心より感謝申し上げます。益々川越初雁会が盛大になりますようお祈り申し上げます。

編集後記

今年度副会長を務めて頂いていた、小高秀一様が平成二十五年十一月二十八日にお亡くなりになりました。謹んで哀悼の意を表します。

発行人

会長 岩堀 弘明

事務局 川越市六軒町一三十三

題字 吉沢翠亭(義和)

印刷 (株)櫻井印刷所